

第3章

朱氏頭皮針の医学理論

第1節 中医学理論を核とする

1 陰陽学説

陰陽学説は、宇宙のすべての物質と現象の総称である。およそ形のあるものは陰に属し、形のないものは陽に属す。たとえば、山川・河の流れ・樹木・雨雪などは陰であり、風雲・雷電・陽光・空気などは陽である。また人体を構成する物質は陰に属す。たとえば、皮・肉・筋・脈・骨・五臓六腑・脳などの組織器官は陰に属す。一方それらの機能は陽に属す。たとえば、思考・行為・心拍・呼吸・消化・会話・歌唱・経絡現象などの機能や活動はすべて陽に属す。

体表での陰陽関係では、頭部・顔面・五官・体幹・四肢などの器官は陰とし、神・顔色・艶・声・気などの状態、および瞬き・挙手・足をあげる・息を止めるなどの運動は陽としている。また、体内での陰陽関係では、細胞の組織（細胞膜・細胞核・細胞液など）はみな陰に属し、細胞の新陳代謝や物質交換などの働きは陽に属すとする。

このように人体の生理・病理のすべては、陰陽に分けられる。そのために『内経』に「陰陽は自然の法則である。万物の規則，変化の根源，生滅の本始，神明のある所である，ゆえに病気を治すには根本である陰陽を求め」 「陰が平穩で陽が蓄えられれば，精神は安泰である。陰陽が別々に

分かれると、精気は途絶える」と述べられているのである。朱氏頭皮針の理論も、まさにこの陰陽学説にもとづいている。

(1) 頭部の定位と陰陽

太極とは1つであるが、陰陽の両面から構成されている。脳の形も「太極」に似ている。朱氏頭皮針の治療区の定位は、易経・道教および中医学の太極思想にもとづき、百会を中心点、督脈を中心線として、前後左右の4つの部分に分画する。前方は陰に属し、後方は陽に属し、右側は血を主り陰に属し、左側は気を主り陽に属す。前頭部にある治療区は主に臓腑の病変を治療し、後頭部にある治療区は主に頸項部・腰背部の病変を治療する。たとえば、前頭部の下焦区に透刺すると、補益肝腎・平肝潜陽の作用をもたらし、肝腎陰虚からくる高血圧症を治療することができる。これは陰を調節して病気を治療するのである。また、督脈の経気の滞りによる頸痛に対しては、病が陽側にあるため、陽を調節する目的で後頭部にある頸区を治療区として治療を行う。

(2) 脳と陰陽

脳は「髓海」と呼ばれ、古くから「泥丸宮」とも「上丹田」とも呼ばれていた。脳は「神」の居るところ、「魂」の住むところ、「魄」の寄るところ、「意」の存するところ、「志」の行くところである。したがって人の五志・六欲・七情はすべて脳と関わっている。

脳は左右に分かれ、球状の形で「太極」に似て、中で陰と陽に分かれる。左脳は右半身を主り、後天の学習で得た知識や技能・言語などはほとんど左脳に蓄えられ、「後天脳」「獲得脳」ともいわれている。また機能面に偏り、体の気や機能を主り、陽に属す。右脳は左半身を主り、祖先からの遺伝と深く関係し、長い歴史のなかで人類が蓄積してきた経験の多くは右脳に貯蔵され、「祖先脳」「儲存脳」ともいわれている。また物質面に偏り、蔵を主り、陰に属す。

驚いたことに、2千年以上前の中国では、すでに脳について現代医学に

匹敵するほどの陰陽理論による認識があった。『靈枢』通天篇では、脳の機能を陰と陽に分け、陰の性格を有する人は左脳に支配され、陽の性格を有する人は右脳に支配されるとしている。その他の第三の性格を有する人は、左右の脳が共同で支配し、思考と行動のバランスがとれた陰陽和平（陰陽バランスが安定している）の性格だと記載されている。また、脳のそれぞれの半球の内部機能は同じではなく、それにより性格も異なり、主に左脳の上半部により支配される性格は多陰性格であり、下半部により支配される性格は少陰性格であるとしている。一方、主に右脳の上半部に支配される性格は多陽性格であり、下半部により支配される性格は少陽性格であるとしている。そして「この5つのタイプの人には、性格や行動は同じでなく、筋骨・気血などもそれぞれ同じでない」と記載されている。

さらに「太陰の人は、陰気が多く陽気がない。そのため陰血は濁り、衛気の流れは滞り、陰陽は調和せず、筋肉は緩み、皮膚は厚くなる。これをすぐに瀉さないと、病気を治すことはできない。少陰の人は、陰気が多く陽気が少ない。胃が小さく、腸が大きく、六腑が調和していない……必ず慎重に調整を行う。その血は脱しやすく、気は敗れやすい。太陽の人は、陽気が多く、陰気が少ない。必ず謹んで調節する。その陰を失わないようにして陽を瀉す。しかし重ねて陽を抜きとると狂いやすくなる。陰陽をみな抜きとると、意識を失い、人がわからなくなる。少陽の人は、陽気が多くて陰気が少ない。経脈が小さく、絡脈が大きい。血液は体の中にあり、衛気は外を流れる。そこで陰を充実させて、陽を弱くする。もしその絡脈だけを瀉してしまうと、強かった衛気が抜けてしまい病気になる。さらに中気も不足して病の回復ができなくなる。陰陽和平の人は、その陰陽の気は調和し、血も順調に流れる。慎重にその陰陽の虚実を診て、その邪正を視る。よく容態を観察して、気と血の過不足を調べる。実証であればこれを瀉し、虚証であればこれを補う。実証でも虚証でもなければ、経脈を取って治療する。これが陰陽を調べて、5つのタイプの人を分けて治療する理由である」というような詳しい記載もある。

中医学では、脳の「形」は陰に属し、機能は陽に属し、陰陽が結合して

できたものであり、さらに脳髄にも陰と陽があるとしている。一方の西洋医学では、脳は、大脳・間脳・中脳・橋・延髄・小脳によって構成され、大脳は左右の2つの半球に分かれるとしている。この両医学の理論にもとづき、筆者も、脳の左脳は「獲得脳」「後天脳」であり陽に属し、右脳は「儲存脳」「先天脳」であり陰に属すると考える。脳は中心溝で前頭葉と頭頂葉に分けられ、中心溝から前側を中心前回といい、運動区に属し陽に属す。中心溝の後側を中心後回といい、感覚区に属し陰に属す。また、脳の機能から分類すると、興奮させる働きを陽とし、興奮を抑制する働きを陰とするというように、脳の陰陽属性を考えている。

(3) 弁証と弁病の陰陽属性

およそ相関する事物には、必ず陰と陽の関係が存在する。中医学と西洋医学の関係も陰陽の関係のようである。中医学は全体観を主張し、臓腑機能を重視するため陽に属し、西洋医学は解剖学的な観点から物質面を重視し、顕微鏡下の実験を重視するため陰に属す。こうした両医学の異なる観点からの違いを、互いに補完しあい、依存する関係にできれば、より完全な医学になるだろう。陰陽の考え方からみれば、片方だけでは不完全である。医学を学習するなら、このような陰陽の両方の観点から把握する必要がある。つまり、全体観に立った中医学と微視観に立った西洋医学の両医学をマスターして、肉体と精神の両方からの治療ができれば、優れた治療家になり、良い治療効果を獲得することができる。

臨床では、中医学は弁証を、西洋医学では弁病を重視する。弁証と弁病の結合も陰陽の結合となる。朱氏頭皮針では、必ず弁証と弁病を同時に行い、正しい治療方針を決める。そして適切な補瀉手技を施すことにより、治療の効果を出す。たとえば、高血圧の原因を西洋医学では色々と考えるが、そのほとんどはアドレナリンの分泌過剰による外周血管の収縮が血圧を高めるからと認識しており、血圧を降下させるためにアドレナリンの分泌を抑制し、外周血管の収縮と痙攣を緩和させる方法、あるいは利尿法を行う。一方の中医学では、肝腎不足・肝陽上亢が血圧を高める主な原因と